

(中略)

【4】村上龍と風俗嬢の交換メール 13th Round From 村上龍 to 藤木りえ

※村上龍と風俗嬢の交換メールは不定期連載です。

リエへ

今、全仏オープンでグラフが勝ったところ。
テニスの試合をじっくりフルセット見たのは久しぶりだった。
ものすごいゲームだった。
まだ興奮が冷めていません。
グラフを応援してたけど、
ヒンギスがあんなに強い選手だとは知らなかった。
これまでヒンギスの試合をじっくり見たことがなかった。

テレビで見るローランギャロス懐かしかったな。
全仏オープンには86年と87年に行った。
ボージョレのワインメーカーがスポンサーについていて、
プレスルームではボージョレワインが好きなだけ飲めた。
軽く酔っぱらって、いいお天気のクレーコートで
テニスを眺めるのは楽しかった。

最近ではテニスはほとんどやらない。
犬と散歩するくらいです。
あとはたまに泳ぐくらいかな。
リエは何かスポーツをやっているの？

今、非常に面白い本を読んでいます。
『単一民族神話の起源 ・ <日本人>の自画像の系譜』
(小熊英二著：新曜社)という本です。
ひと頃話題になったから、読んでいる人も多いと思うんだけど、
こんなに面白い本に出会ったのは本当に久しぶりだ。
「日本人はどこから来たのか？」
「日本人のルーツは？」
「日本人は単一民族か混合民族か？」
みたいなことが、よく言われるけど、
この本はそういった言説がどのようにして生まれ、
どのようにして世論・一般論として形成され、

どのようにして定着し、どのように歴史に影響したかを膨大な資料から検証するというものです。

たとえば柳田国男に関する章で、

著者は次のように書いています。

「・・・<われわれ>の描き方は<彼ら>との関係で決まる。ゲルマンやラテン、カトリックやプロテスタントといった自画像しかなかった人々が、アフリカやアジアとであって『ヨーロッパ』や『白人』という自己を発見したように、薩摩人や水戸人も、黒船の衝撃で『日本人』を発見した。柳田もまた、ヨーロッパとの対決によって、『日本人』を単一の存在として描く視点を体得したのである」(第12章「島国民学誕生」より)

80年代の終わりにテニス見物に行っている頃、

ぼくはただのツーリストだった。

ツーリストとしてヨーロッパを体験するのは辛いところがある。

何て言うか、歴史の重みと彼らの自信に押しつぶされそうになる。

1980年代でも辛いのだから、

明治の開国時代に欧州に視察に行ったエリートたちのショックはすごいものがあっただろう。

彼らは日本のアイデンティティを必死になって探り始めるのだが、

その様子はビッグバンを迎える現代にも通じるものがある。

つまり現代に絶望した人間は、

過去に目を向けるようになるというようなことなんだけど、

今度会ったときに詳しく話します。

でも欧州コンプレックスは厳然として残っているよね。

フランスでもイタリアでもドイツでも、

地方都市やリゾートに日本料理屋なんかないでしょう？

でも、鎌倉とか伊豆とか、その他のちょっとした地方都市とかにもなぜかイタリアンやフレンチがあるんだよ。

料理というのは素材や水や調味料・香辛料が重要だから、

基本的にローカルなものなのに、

日本の地方都市にひどくまずいフレンチやイタリアンがあるのは

かなり不思議なことなんだけど、

もっと不思議なのは誰もそれを不自然に思わないってことです。

じゃあ、また。

来週グランダムのお酒を飲もうか・・・。

柳田国男や中原中也は当時のヨーロッパで

グランダムやドンペリの酒とか、

クリュグとか、飲んだのかな？

いや、別にグランダムのお酒を飲んだからって

どうということもないんだけどさ

村上龍

■■編集長より読者のみなさんへ■■

最近、圧倒的に感銘を受けた本を二冊紹介します。一冊目は、前号の「風俗嬢との交換メール」にも書きましたが、小熊英二著『単一民族神話の起源』（新曜社）で、もう一冊は同じ著者の『<日本人>の境界』（新曜社）です。

経済の大停滞の中で、「日本論」あるいは「日本人論」も盛んになっています。小熊氏の二冊の著作は、日本や日本人の心性や特性やルーツについて書かれたものではありません。単一民族という神話や、日本人という概念が、明治以来どのように発生し、どのように定着し、どのような影響を歴史に与え、そもそも日本の植民地政策に理念や哲学や法制による一貫性があったのか、ということ膨大な資料から検証するものです。

印象深いのは、著者が開国以来の日本の植民地政策を検証するときに、日本対沖縄、日本対朝鮮、日本対台湾、という二項対立ではなく、欧米という第三項を加えることで、より明確な視点を持ち得ていることです。

「・・・『植民地』という『彼ら』を排除して『日本』という『われわれ』を構築するという路線のほかに、『欧米』という『彼ら』に対抗するべく『日本』という『われわれ』を拡張するという路線が存在したのである。

（『<日本人>の境界』序章より）」

できるだけ多くの人に読んで欲しいと思い、ここに紹介します。

村上龍

(中略)

【WEB】 <http://www.agey.co.jp/JMM/>

【MAIL】 jmm-info@agey.co.jp

【発行】 メールメディアオフィス (FAX 03-5325-5748)

【編集】 村上龍

配信のお申し込み、解除、変更は <http://www.agey.co.jp/JMM/>
Japan Mail Media は WEB 上でもご覧になれます <http://www.agey.co.jp/JMM/>

広告に関するお問い合わせは ad-jmm@agey.co.jp まで

Copyright(C)1999 AGEY co.,ltd 許可無く転載することを禁じます。